

『一つの御霊 一つのからだ』（使徒 2:1～13・I コリント 12:13）

【開会聖句】

I コリ

12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。

<序論>

・『五旬節』というのはユダヤ教の収穫祭にあたります。ですから、1 節にあったように、「皆が同じ場所に集まっていた」のです。旧約聖書の「レビ」には次のように書かれています。

『あなたがたは、安息日の翌日から、奉獻物の束を持って行った日から満七週間を数える。七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物を主に献げる』（レビ 23:15,16）。

今、読んだ中に「満七週間を数える」とあることから、この祭りは「七週の祭（シャブオット）」と呼ばれ、「過越祭（ペサハ）」から始まる春の四つの祭りの最後を飾る祭りと考えられています。また、ギリシア語で、「五十番目」のことを「ペンテコステ」と言いますが、そのことから、キリスト教会では、今朝の出来事を「ペンテコステ（聖霊降臨祭）」と呼び、初代教会（エルサレム教会）が誕生した日として祝っています。「クリスマス」と「イースター」は、ユダヤ教ではお祝いすることはありませんので、「ペンテコステ」だけは、ユダヤ教とキリスト教が同じ日にお祝いをしているということですね。ただし、その祝っている内容については、全く異なっているわけですが。

<本論>

1、風、息、聖霊

今朝、読んでいただいた箇所の前半部分は、何か大きな隕石のようなものが天から落ちてきた様子のようにも思えます。実際、今から 11 年ほど前になりますが、ロシアのチェリャビンスク州というところでかなり大きな隕石が落下した時の様子をテレビで見た記憶があります。その時に起こったことと 2,3 節で描かれていることは似てるような気がします。

『すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった』（使徒 2:2～3）。

もちろん、今朝の出来事は隕石の落下ではなかったのですが、2 節に『激しい風』とありました。この『風』というのは、旧約聖書においては神様の霊を表すことばです。（ヘブル

語「ルーアッハ」)そして、このことばは「息」とも訳されます。「創世記」2章に次のよう
にあります。

『神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。
それで人は生きるものとなった』(創世 2:7)。

また「エゼキエル」37章の不思議な幻。干からびた骨が生き返るといふ幻も、次のよう
にあります。

『神である主はこれらの骨にこう言う。見よ。わたしがおまえたちに息を吹き入れるの
で、お前たちは生き返る』(エゼ 37:5)。

その後の7~8節に書かれてあることなんか、ビジュアル的にはまるでホラー映画のよう
なんです。これはバビロンによって滅ぼされ、奴隷の状態にあったイスラエルの民が、
神の息によって解放され、国が再興されることを示した幻として受け止められています。
そして、その幻は、今朝の出来事の「予告編」のようなものだったと言えないでしょうか。
弟子たちは、突然、イエス様がいなくなって、希望も何もかもが失われ、まるで干からび
た骨のようになっていたと思います。そんな弟子たちに神の息が吹きかけられた。つまり
聖霊が降ったんです。そのことによって彼らは生き返り、天から力を得て、それまで人の
目を恐れて、こそこそと家の奥に隠れていたのが、大胆にキリストを証しする者へと変え
られたのです。

そして、もう一つ、3節にあった『炎のような舌』ですが、それが具体的にどのような
ものであったのかは分かりません。ただ、この炎というのは、かつてモーセが目撃したとい
う燃える柴の出来事を連想させるものです(出エ 3:2)。それは神のご臨在を、神がとも
におられるということを表すしるしでした。そして、その炎のような舌が一人ひとりの上
にとどまった時、不思議なことが起きるのです。

2、他国のいろいろなことば(異言)

『すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し
始めた』(使徒 2:4)。

この、新改訳聖書が『他国のいろいろなことば』と訳しているギリシア語の直訳は、「異
なることば」です。「異なることば」、すなわち「異言」と言います。このしるしと言うか、
賜物を特に強調し、重視する教会もあります。彼らは、「ペンテコステ派」と呼ばれること
が多いのですが、天から聖霊のバプテスマを受けることによって特別な力をいただくこと
ができる。そのしるしが「異言」ということです。世界には、特にアメリカや韓国には、「メ
ガ・チャーチ」と呼ばれるような大規模教会がいくつもあります。その多くは、ペンテコ
ステ派か、その影響を強く受けている教会です。私は今まで「異言」で祈ったことはあり
ませんし、ここにおられる皆さんの多くもそうだと思います。ですから、正直に言って、
よく分からないのですが、信仰は、確かに感情的なものであり、それがなければ成立しな
いと思います。ただ、逆に考えると、信仰はそれだけに、冷静さを失ってはならない、と
言えるのではないのでしょうか。なぜなら、冷静さを失うと、信仰は単なる自己陶醉のよう

になり、普遍性をなくして、ただの盲信となってしまうからです。しかし、その一方で、次のようにも言えるでしょう。冷静さを保つということだけにこだわると、人間の努力や判断や作為が前面に出て来てしまう。そうすると、信仰は頭でっかちの、冷たい、いのちを失った道德のようになってしまう。本当に難しいですね。ただ、聖書が、この「異言」などの御霊の賜物について語っていることは、何か特定の賜物だけを特別視して、他よりも優れたしるしのように受け止めることには問題があるということではないかと思えます。例えば、「I コリ」12章以下で、パウロははっきりとそう語っています。

『あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。私は今、はるかにまさる道を示しましょう』（I コリ 12:31）。また、「ガラテヤ」5章でも、

『しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません』（ガラ 5:22,23）と語っています。

<結論>

今朝のメッセージのタイトル「一つの御霊 一つのからだ」なんですが、そのタイトルも、「I コリ」12章13節から取りました。

『私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです』（I コリ 12:13）。

旧約聖書の「創世」11章に、有名な「バベルの塔」の出来事が記されていますが、その最後は、皆さんもよくご存知のように、混乱と分裂でした。天にまで届くような塔を建てて、自分たちの名を上げようと考えた人間たちに主は言われました。『さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう』（創世 11:7）。それで彼らは混乱し、全地に散らされてしまったのです。このバベルとは「神の門」という意味ですが、「バビロン」とも訳すことができます。聖書で「バビロン」とは、人間の罪を表すことばです。私たち人間の世界に罪が入り、各々、自分勝手な道を歩むようになり、私たちは、神に背を向け、互いに殺しあう者となってしまった。今朝の「使徒」2章9～11節には、多くの人種や地域、国の名前が記されていますが、それらの地域のほとんどは、今でも紛争と断絶の中にあります。イスラエルとパレスチナはもちろん、シリアやリビア……。いつ終わるとも知れない憎しみの連鎖です。いや、それは、戦争は無かったとしても、私たちの国、日本でも同じではないでしょうか。そんなことを考えながら、今朝の「ペンテコステ」の出来事を読む時、神の国、神さまが支配される世界は、人種や民族、国や地域に関係なく、言葉の壁もなく、自由に話し合うことができ、時にはぶつかることがあったとしても、分かり合うことのできる世界であるということ、改めて思われます。この地上における神の国の雛型は教会です。教会はキリストのからだと言われますが、ちょうど私たちの体の各部分は、それぞれが同じではないけれども、すべて合わさって一つであるように。